

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 4 月 28 日現在

機関番号：14301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770231

研究課題名(和文)日本の「終戦」と戦後秩序の諸構想－「宮中」の動きを中心に－

研究課題名(英文)Japan's long road to surrender and its political aftermath

研究代表者

鈴木 多聞 (Suzuki, Tamon)

京都大学・白眉センター・特定准教授

研究者番号：70636216

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：降伏から占領期にかけての(1)昭和天皇・宮中周辺の政治活動(2)鈴木貫太郎の政治活動(3)重臣の近衛文麿による新憲法草案の三点を重点的に取り上げ、戦前の旧支配勢力が戦後秩序をどのように構想し、それが日米間でどのような相互作用を生み出したのかを明らかにした。論文としては「昭和天皇と日本の『終戦』」(『歴史のなかの日本政治 2 国際環境の変容と政軍関係』中央公論新社、2013年)を発表し、昭和天皇の抱えていた様々な政治課題が、どのように政治日程に影響を及ぼしたのかを論じた。また、「日米戦争下の昭和天皇と軍事情報」(日本政治学会 2013 年度研究大会)と題した学会発表を行った。

研究成果の概要(英文)：This research deals with the period between Japan's surrender and the start of the occupation. It mainly focuses on three points: 1) the political activities of Emperor Hirohito and the court, 2) the political activities of Kantaro Suzuki, and 3) Fumimaro Konoe's proposed constitution. This project also addresses the question of how wartime leaders conceived of the future postwar political order and how their vision affected the relationship between Japan and the United States at that time. The results were presented in a conference paper delivered at the Japanese Political Science Association. That presentation in turn served as the basis for an article entitled "Emperor Hirohito and Japan's decision to surrender." This article discusses the various political issues involving the emperor at the end of the war.

研究分野：日本近代史

キーワード：終戦 天皇 宮中

1. 研究開始当初の背景

冷戦の終結以降、戦争は内戦化し、増加しているといわれている。戦争を政治の失敗とみなして、戦争と平和の関係を再考する必要があるともいわれている。これまで、日本の「終戦」の政治過程を分析し、原爆投下やソ連参戦といった軍事的圧力だけでなく「信頼」の有無が最終局面において結果を左右したと結論づけてきた。

2. 研究の目的

一般的にいつて、戦争は始めることより、終わらせることの方が難しい。戦争の終結に際して、政治指導者はどのような行動をとるのか。あるいは、戦争目的はどのように再定義されるのか。そして、戦争が終結した後、どのような形で「戦後」を構想するのか。こういう点を明らかにする。

3. 研究の方法

研究期間内において、昭和天皇や宮中グループを重点的に調査した。「戦前」から「戦後」にかけての政治史分析は「勝者」と「敗者」の対立構造が、やや強調されすぎているといわれている。そこで「戦前」から「戦後」にかけての宮中グループの政治的役割について再検討した。

4. 研究成果

(1) 論文「昭和天皇と日本の『終戦』」(北岡伸一編『国際環境の変容と政軍関係』中央公論新社、2013年)を発表した。本論文では、1945年4月から8月までの昭和天皇について論じた。戦局の悪化とともに、どのような政策の変化がみられたのかというアプローチを目指した。この背後には「終戦」なり「継戦」なりは、政治的手段にすぎないという視点がある。

戦時下、昭和天皇のストレスは非常によかった。国家レベルにおける因果関係と、個人レベルにおける因果関係とはわけて考

える必要がある。これは、歴史研究者は、結果を知っているために、結果につながる要因の方に目をむけがちであり、史料が多く残っている出来事の方に関心が向かいがちであるからである。

米軍の空襲によって、宮殿が炎上し、皇居内で死者がでるような状態では、通常の心理状態を維持することは難しい。また、皇居内には、一号演習(特殊防空壕の工事)の騒音が響き渡っていた。その上、空襲警報によって、睡眠が中断された。『昭和天皇実録』の公開によって、昭和天皇が、深夜、「動座」を余儀なくされていた日時や時間が明らかになった。これは、従来の研究においても、十分に想定されていたことではあるが、詳細な時間が明らかになった意義は大きい。

昭和天皇の立場からみれば、内閣や統帥部の主張や情報は、不安定なものであった。しかも、公的な場においては、政治的影響に配慮して、本音と建て前を使い分ける責任者もいた。

日本の「終戦」への道のりは、原爆投下やソ連参戦といった「外圧」を中心に語られることが多い。だが、原爆投下やソ連参戦については、昭和天皇は、軍部よりも具体的な情報や数字に接することはなかった。他方、原爆投下以前の政治状況にも焦点をあてると、別の論点が浮かび上がる。昭和天皇は本土決戦については非常な関心を払っており、独自に情報を収集していた。また、天皇が東京から松代に移動することは、昭和天皇にとっては大問題であった。『昭和天皇実録』によっても、三種の神器の移動日程が、かなり現実的なものであったことが裏付けられている。

昭和天皇が降伏に踏み切った最大の要因は、本土決戦が行われれば、日本が玉砕すると考えていたことが指摘できる。昭和天皇は、本土決戦の見通しについては、軍部の主張をほとんど信頼していなかった。むしろ、負けると考えていた。このようにして考えると、8月の御前会議の昭和天皇発言において、九十九里浜の防備があげられていることも説明がつく。

昭和天皇が東京から松代に移動する具体的な日程はどのようなものであったかは判然としない。だが、沿岸決戦に敗れば、移動を余儀なくされることは十分に予想できた。移動の日程が近づくとつれ、昭和天皇はどのように感じたのか。当時の政治日程との関連性で注目されるべき点である。

降伏という事態を前にして、政治指導者が迷ったことは、十分に想像がつく。このような政治状況下においては、軍部の主張が強硬であればあるほど、戦争終結の好機があれば、最悪の事態を回避しようという心理が働いたと考えられる。

その一方で、戦争の継続にしろ、降伏にしろ、当事者にとっては苦渋の決断であった。したがって、無条件降伏であれば、いつでもできるという考え方もあり、なんとかして、少しでもそれを緩和しようという動きもあった。

限られた時間と不確実な情報の中で意思決定をせまられたとき、過去の経験と現状の評価とを軸に意思決定をする傾向がみられた。したがって、現在の観点からみれば取るに足らない出来事ではあっても、当事者にとっては、より大きくみえた可能性がある。このようにして考えると、昭和天皇の軍部に対する不信感を加味して、降伏の

決定過程を考察する必要があると考えられる。

(2) 2013年9月16日に北海学園大学で開催された日本政治学会2013年度研究大会において「日米戦争下の昭和天皇と軍事情報」と題して報告した。昭和天皇の政治判断を理解するには、昭和天皇の入手していた情報を明らかにする必要がある。昭和天皇は、ある段階から軍部の報告を完全には信用しなくなり、情報の収集につとめていたことが明らかとなった。実際の戦局、軍部の認識、天皇への報告、大本営発表の4者がどのように関係していたのかについては、さらなる分析を行う必要がある。

2014年に『昭和天皇実録』が公開されたことによって、研究の飛躍的発展が見込めるようになった。昭和天皇が、いつ、どこで、誰の拝謁を受けていたのか、あるいは（おそらく）受けていなかったのかが明らかになった。このことは、拝謁の間隔を推定できる研究レベルになったことを意味する。これまでのように拝謁の日程をめぐって、いくつかの説が成り立つこともなくなった。したがって、時間をかなり正確に特定し、情報の流れまでも推定できるようになった。拝謁の回数が多かった人物も明らかになっている。史料の残り方のばらつきが歴史解釈に与える影響も減らせる。『昭和天皇実録』の公開が実証研究に与える影響は、かなり長期にわたると考えられるので、小さな事実を一つ一つ積み重ねていく姿勢が求められている。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔学会発表〕(計 1 件)

鈴木多聞「日米戦争下の昭和天皇と軍事情報」
(日本政治学会2013年度研究大会、北海学園大
学、2013年9月16日)

〔図書〕(計 1 件)

鈴木多聞「昭和天皇と日本の『終戦』」(北岡
伸一編、大澤博明・畑野勇・朴廷縞・中澤俊
輔・大前信也・鈴木多聞著『歴史のなかの日
本政治 2 国際環境の変容と政軍関係』中央公
論新社、2013 年、261-299 頁)

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木 多聞 (SUZUKI, Tamon)
京都大学・白眉センター/法学研究科・特定
准教授

研究者番号：70636216